



2025年9月1日
都留文科大学 国際教育学科
専任講師 佐々木南実

都留文科大学と北海道鹿追町とのMYPの協働

地域と教育が紡ぐ未来 —— 北海道・鹿追町との協働

2025年、都留文科大学と鹿追町教育委員会は「IB教育推進に関する連携協定」を締結。大学は理論と人材を提供し、地域は学生へのIB実践の場を提供するという新しい協働のかたちが始動しました。学生には挑戦の機会が、学校現場には専門的なサポートが生まれ、双方にとって大きな学びとなっています。

北海道・十勝平野の自然豊かな町、鹿追。人口減少や少子化という課題を抱える一方で、「教育をまちづくりの中核に」と掲げ、全国に先駆けて改革を進めてきました。その一環として町立中学校に国際バカロレア（IB）のMYPを導入する準備が進んでいます。

今回ご紹介するのは、IB Educator Certificateを取得しMYP教員として勤務後、渡米前の半年を鹿追町で過ごした丸谷さんの活動です。町の教員宿舎に滞在し、瓜幕中学校・鹿追中学校での教員研修や授業実践、保護者・地域向けのワークショップを展開。地域と学校に寄り添いながらIBの価値を体現しました。

こうした取り組みを通じ、鹿追町は「地域が教育を支え、教育が地域を育てる」という循環を形にしています。丸谷さんのような実践者が大学から地域へと橋をかけ、地域全体にIB教育の可能性を浸透させる。そのプロセスこそが、今後のIB教育推進のモデルになると確信しています。

教員・保護者・地域を巻き込む多彩なワークショップ

丸谷さんは短期間でありながら、校内外で多様な学びの場を実現しました。

- **教員向け研修**：「概念理解」「形成的評価」「IDU」研修を実施。授業改善や探究的な学習設計の視点を共有。
- **保護者向け企画**：「IBキャリアカフェ」でIB教育の実際と進路を対話形式で紹介。卒業生による動画メッセージも交え、保護者の安心感につなげました。
- **地域向け公開講座**：「これからの学校教育～国際バカロレアで何が変わる？～」をテーマに、住民自らが運営する形で実施。教育を町全体のテーマとして議論しました。



教員研修の延長からは「中一対象プチIDU」が生まれました。数学・英語・道徳を横断しながら「伝える力と、聴くやさしさ」をテーマにした授業は、生徒たちにとって大きな挑戦でした。最終的には校長室でのプレゼンにまで発展し、地域に根ざした実践が子どもたちの探究を加速させた好例となりました。

大学と地域の協働がもたらすもの

鹿追町の挑戦は、単なるIB導入事例にとどまりません。そこには「教育が地域の未来を拓く」という強い意志があります。そして、その現場に学生や若手教員が飛び込み、共に学び、育ち合うことは、大学にとってもかけがえのない資産となります。

地域の学校で経験を積んだ学生が再び大学に戻り、理論的な学びと実践的な知見を往復させる。そのプロセスから新しい研究テーマが生まれ、さらに次の世代の教員養成にもつながります。鹿追町での協働は、教育学の実証研究の場であり、同時に「人を育てる場」として大学教育を豊かにしています。

また、IB教育を通じて「問いを立て、協働し、解を探す」という姿勢は、学校内にとどまらず、地域社会全体に波及しています。教育が町の未来戦略そのものである、という鹿追町の姿勢は、他地域にとっても大きな示唆を与えるはずです。

★ 教員の声

穂山先生（MYPコーディネーター）より

丸谷さんはコーディネーターの補佐として着任していただきましたが、補佐という枠を超えて丸谷さんはこれまでの経験を最大限に活かしてくれました。校内研修のワークショップを引き受けていただき、「概念理解」「形成的評価課題」「探究テーマの教科間によるつながり」をテーマに3度も実施してくださいました。教員のIBに対する理解が一気に深まりました。それだけではなく授業の合間等にも教員と積極的にコミュニケーションをとり各々の悩み相談にものっていただいていたいました。また、英語の授業をサポートのみならず協働設計まで行ってくださいました。授業参観日の全体懇談では、IBキャリアカフェを開催、地域の公民館でIB体験授業を実施するなど、まさに大車輪のご活躍でした。たった3ヶ月ではありましたが、丸谷さんに本校で勤務していただいたことで本校のIB教育が大いに発展しました。丸谷さんはもちろん、このような素晴らしい方をご紹介いただいた佐々木先生にも感謝申し上げます。

★ 実践者の声

丸谷さんより

瓜幕中ではIB教育者としての桃源郷を見させてもらった感覚です。生徒、教師、地域、三方よし。伝統的な価値観や様式も大切にしつつ、柔軟な先生方、協働学習に前向きな生徒たち、そして、それを面白がってくれる地域みなさんと出会うことができました。先生方お一人お一人が雑談ベースで「これってどういうことだろうね?」「何のためにしてるんだっけ?」と話し合う文化が醸造されているように感じました。一方で、日々の業務の多さから協働のための時間にかかなりの制約があることを痛感した経験でもありました。はじめてサブコーディネーターという立場から学校を俯瞰する機会をいただいたことで、新たな視点から実践を見ることができました。本質を最上位目標に置き、新しくはじめることと大胆にやめることを後押しする環境と、かつそれらのアイディアを自由に募る仕組みの大切さを感じました。小規模校だからこそ「やってみよう!」のスピード感が出せる鹿追町ではこれからもっともっと、いろいろな活動が広がって行くでしょう。私は瓜幕中で、地方+公立+IBに無限の可能性に魅せられました。私のIB教育の旅を豊かに彩り、IB教育での探究と貢献の意志をあらたにしてくれた大好きな瓜中のみなさまに最大限の感謝を伝えたいです。

これからの展望

丸谷さんのような実践者が現場に入り、地域と大学をつなぐ事例はまだ始まったばかりです。しかし、こうした取り組みの積み重ねが、将来の「地域×大学×IB」という新しい教育エコシステムを形づくっていくでしょう。

都留文科大学は今後も、理論と実践をつなぐ架け橋として、地域の挑戦とともに歩んでまいります。鹿追町の学校、そして地域全体がIB教育を通じて「未来を共に創る場」となっていくことを期待しています。